

文化財めぐり 文化財サポーター 第3班

発行日 平成17年11月18日
発行所 長崎市魚の町5-1
長崎市教育委員会
生涯学習部文化財課
TEL 829-1193

長崎街道出発地より本河内あたり



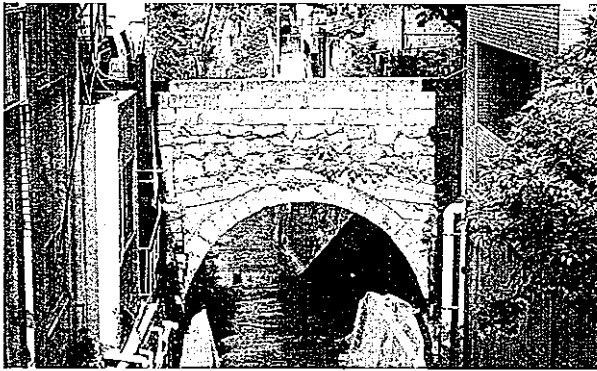
長崎版画 長崎八景 (市瀬晴嵐)

日時 平成17年11月19日(土) 10:00~12:00
コース 諏訪神社~一の瀬口・堂茶屋~番所跡バス停
主催 長崎市教育委員会
講師 文化財サポーター 3班 7名

長崎村庄屋 森田家宅跡

長崎甚左衛門純景（14代領主）は、現在の桜馬場中学校のところに屋敷を構えていた。江戸時代は長崎村の庄屋、森田氏の屋敷で、十善寺～本河内までの13郷を支配し、明治10年（1877）頃まで居住していた。庄屋の下には散使2人、郷乙名13人、筆者1人、細使い1人、山留1人などが置かれていた。庄屋屋敷では正月12日と13日の2日間踏絵が行われていた。

明治11年、長崎村は上長崎村と下長崎村に別れ、上長崎村は10郷を管掌していた。同役場は最初春徳寺にあったが、その後中川郷を経てこの地に移転、明治22年（1889）に夫婦川郷など一部が、大正9年には全部が長崎市に合併された。（峰）



古橋（市指定有形文化財）

鳴滝川に架かるこの石橋は、一の瀬から桜馬場に通ずる長崎の玄関口にあたり、承応3年（1654年）唐通事・林守壁が私財を投じて架けた。創架後崩壊の記録はないが、現在は勾欄、親柱などをそのまま埋めこんで約1mかさ上げしてある。車の交通の便のため明治初期の改修と思われる。経間5.1mでこの川の最小の石橋であるが、側壁石に入念な仕事ぶりを見ることが出来る。

大正7年（1918）下流に新しく中川橋が架かり、この橋は古橋と改称された。（上西）

一の瀬口（市指定史跡）

一の瀬口は一の瀬橋を中心とする旧長崎街道の一部。長崎八景の一つで「市瀬晴嵐」とうたわれた。晴嵐は晴れた日の山がすみという意味。長崎甚句に“送りましたぞ送られましたぞせめて一の瀬あたりまで”と歌われ、長崎を旅立つ人々がここで別れを惜しみ、水盃を酌み交わしたところ。

○一の瀬橋

承応2年（1653）唐大通事 陳道隆（日本名 穎川藤左衛門）が私財を投じて架設した半円形の石橋。日見峠から源を發し、英彦山と烽火山の間を流れる市瀬溪（いちのせがわ）があり、

一の瀬橋が架かっている。橋銘にローマ字で「ICHINOSEBASHI」とあるが、これは明治20年（1887）頃刻まれたものである。

○螢茶屋

昔この付近は樹林が茂り、夏は螢の名所であったので、いつの頃からか「螢茶屋」と呼ばれた。

長崎を旅立つ人と見送りの人達とが、別れを惜しんで酒を酌み交わしたのもこの地であるが、当時を偲ぶ遺構は、今では一の瀬橋と付近の街道の一部だけとなっている。

茶屋は化政年間（1804～29）に甲斐田市左衛門によって始められ、2代政吉の頃（幕末～明治初期）が最盛期。はじめ「甲斐田屋」と呼んでいたが、この付近一帯が螢の名所であったため「螢茶屋」と称するようになった。6代、大正時代頃まで続き、その後なくなった。（岩永）

渡鳥塚（市指定有形文化財）と地蔵

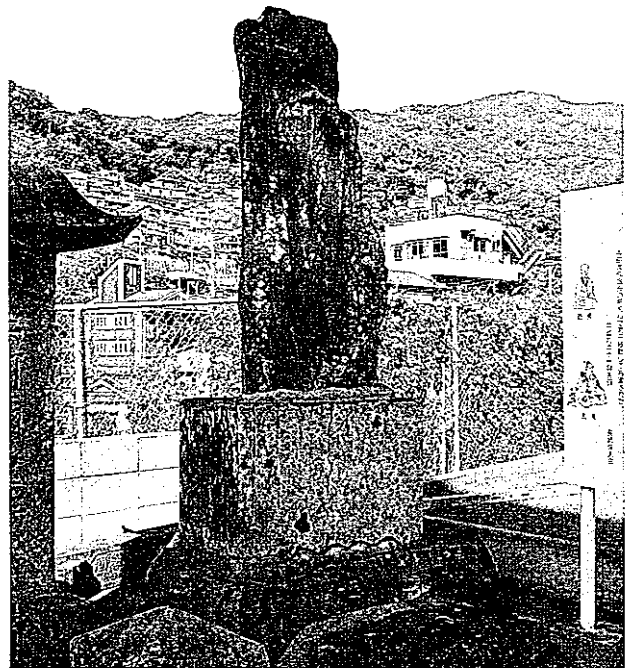
文化10年（1813）に長崎の俳人たちが芭蕉翁120回忌、去来110回忌にあたり、馬町墓地に建立したもの。

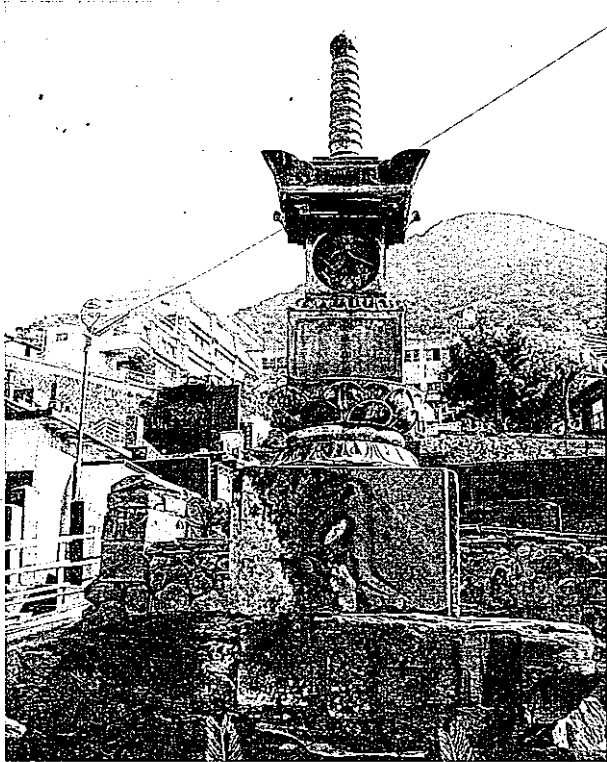
「めにかかる雲やしばしのわたり鳥 翁」

「故さとも今はかり寝や渡りどり 落柿舎」

芭蕉・去来師弟の句が刻まれている。

句碑の横の地蔵は馬町の講中が建て、俗説に子供の死後、さいの河原の救い主であるとなっているが、往来の人の多い街道に建てて旅人の道中安全を祈願したものと言われる。（上西）





からかねとう

青銅塔（市指定有形文化財）

享保6年（1721）7月28日夜半の中島川の洪水は物凄く、死者46人、流失石橋8、流失家屋120戸にのぼった。

この時、当地に滞在していた下野国安蘇郡粕屋村出身の木唐僧、観心が発願主となり、今紺屋町、中紺屋町の人達が援助して慰霊の塔を建てた。

鑄造は鍛冶屋町の鑄物師、安山弥兵衛国久で、塔身正面には「天下泰平御祈祷」の銘を刻み、後三面に梵字で「宝篋印陀羅尼經」を刻み、円台に、寄進者名が刻まれている。露天に建立された青銅製の宝篋印塔は全国でも珍しく、長崎鑄物師の業績として高く評価されてよい。（吉田）

一の瀬無縁塔（市指定有形文化財）

寛文2年（1662）長崎に痘瘡が流行し、死者2318人に及び、特に嬰兒の夭折が多かった。この時、長崎総町が崇福寺の唐僧・即非に偈を請い、その法師唐僧化林・碧崖・曇璉らが経を写した塔を、この年の7月15日一の瀬街道に建てた。大正13年（1924）国道開通に際して、現在地に移された。

尚、四面の上部に納めていた銅仏像のうち、地藏菩薩が昭和29年（1954）に盗難にあったので、残る三体は長崎市立博物館（現、長崎歴史文化博物館）に保管し、現在は代替像を安置してある。

（正面・釈迦如来、向かって左・阿弥陀如来、右・観世音菩薩、背面・地藏菩薩）

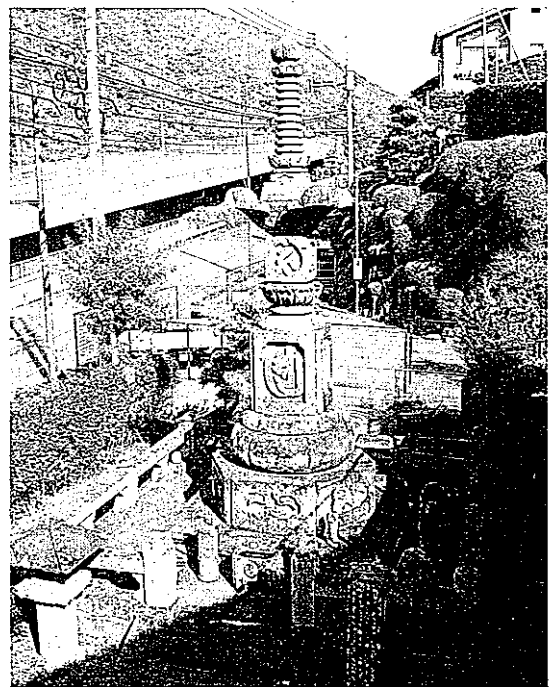
長崎の過去に天然痘の流行があったこと、それで死んだ子どもたちのために、長崎総町をあげてこれを哀しみ供養したことなど、先人のゆかしい心がけが偲ばれる。（白鳥）

力士 丸山權太左衛門の墓

宮城県米山村の出身。本名、芳賀銀太夫。身長6尺5寸（195cm）体重43貫（161kg）第3代横綱。大関在位16年間で負けたのは2度だけ。

宝暦年間（1751～1764）以前の星取表が現存せず、生涯成績、優勝回数など不明。頭のとっぺんがとがっていて、全身が真っ黒、見るからに強豪力士だったという。五斗の俵に筆を差し、その俵を持ち上げて字を書いたという逸話もある。

寛永2年（1749）横綱免許を受けたが、長崎小島の梅園芝居所での興行の折、破傷風にかかり（一説では赤痢という）11月14日客死。享年37才。葬儀は長崎の皓台寺（曹洞宗）で盛大に行われた。（宮崎）



本河内宝篋印塔（市指定有形文化財）

文化8年（1811）本籠町住の薬種商、中村盛衛門仲熙・喜右衛門茂濟父子が造塔施主となり、肥後の天台宗の僧侶豪潮が指導して建てた高さ6.2mの石造りの供養塔。この塔は、豪潮様式と名付けた方が良くと思われるほどの、形式もデザインも著しく豪華なもので、それまでの宝篋印塔と異なったものがある。

特色としては、笠の隅飾が偉大で華麗であり、塔身と基礎との間に蓮座と第二の塔身がある。

また四方仏の装飾された種子が重厚である。

長崎地方における文化文政期（1804～29）には祈願塔や供養塔の建立が多いが、原形をとどめているものは殆どない。長崎市内には清水寺、禅林寺、春徳寺にあるが、豪潮という密教僧が指導して建てたいわゆる豪潮様式のものはこの塔だけで、しかも供養塔としては最大規模のものである。（嶺川）

コースと説明場所

コース順	説明場所	指定文化財	説明者
1	長崎街道について		上西秀男
2	諏訪神社一の鳥居		宮崎 健
3	大手橋		上西秀男
4	長崎街道ここに始まるの碑		上西秀男
5	桜馬場天満宮		宮崎 健
6	春徳寺入口		上西秀男
7	森田庄屋跡 (桜馬場中学校)		峰 敏江
8	伝八稲荷		峰 敏江
9	鳴滝塾跡入口		上西秀男
10	古橋、トロトロ坂	市有形文化財	上西秀男
11	一の瀬口、一の瀬橋	市史跡	岩永芙美子
12	渡鳥塚	市有形文化財	上西秀男
13	花見塚		上西秀男
14	青銅塔	市有形文化財	吉田敬三郎
15	南京房義円の墓		上西秀男
16	一の瀬無縁塔 (お亀の塔)	市有形文化財	白鳥純子
17	力士 丸山権太左衛門の墓		宮崎 健
18	大橋宗銀の墓		上西秀男
19	本河内宝篋印塔	市有形文化財	嶺川 洸
20	聖母の騎士、聖コルベ記念館		吉田敬三郎
21	日見新道、番所跡 (解散)		上西秀男

